

令和元年5月30日現在

機関番号：17401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H06964

研究課題名（和文）近代日本における「国民感情」形成過程に関する基礎的研究 新聞『日本』を素材に

研究課題名（英文）Basic Study on Formation Process of "National Emotion" in Modern Japan : Survey of the newspaper "Nippon"

研究代表者

鈴木 啓孝 (SUZUKI, Hirotaka)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・准教授

研究者番号：20803711

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：新聞『日本』の精査を通じて、社長兼主筆の陸羯南を中心とした「思想集団」としての日本新聞社に関する理解を深めたことが本研究の成果である。具体的には、明治23（1890）年当時表面化しつつあった都市貧民問題にいち早く着眼した『日本』が桜田文吾による貧民窟潜入ルポルタージュの連載を始め、その成功を受けて社説欄・論説欄・文苑欄などを活用した関連記事の掲載が続き、そうした人気記事をアピールしながら新聞広告を募っていた流れを捉えた。都市貧民問題という社会問題に関わる報道を、購読料収入と広告料収入、各々の増収につなげられたため、創業2年目の新聞社が経営の安定化に成功したという経緯が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治20年代（あるいは1890年代）の日本社会に関する理解を深めるにあたり、政治思想史分野（陸羯南及び福本日南という個人思想の研究）、社会史分野（近代都市における貧困問題の研究）、国文学分野（潜入ルポルタージュの研究）という3つの研究分野の違いによって大きく分裂していた学問的知見を、メディア史研究の観点から1つに統合して提示したところに本研究の学術的意義があったものと考えている。また、新たな着眼によって得られた学問的知見を、国内研究会のみならず国際学会の場において発信したところに本研究の社会的意義があったものと考えている。

研究成果の概要（英文）：The summary of the this study is as follows. The newspaper "Nippon", who first focused on the urban poor issue that was beginning to surface in 1890's Japan, has begun serialization of reportages by SAKURADA Bungo who sneaked into the slums. Depending on those successes, "NIPPON" continued to post related articles on editorial columns and literary columns, and also recruited newspaper advertisements. KUGA Katsunan who became a president of the Nippon newspaper company has succeeded in stabilizing its business due to increase subscription and advertising revenue.

研究分野：思想史

キーワード：思想史 日本史 文化史 ナショナリズム マスメディア ルポルタージュ 貧困問題 国民感情

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者によるこれまでの研究の概要：研究代表者はこれまで、明治 20 年代の日本に西洋由来のナショナリズムを導入した新聞『日本』主筆・陸羯南の青年時代、つまり『日本』発刊以前である明治 10 年代の陸を対象とした研究を行ってきた。その際、完成した政治理論家による完結した論説を静態的に分析するのではなく、所属先や職業が定まらず、揺れ動く不安定な立場にあって、青年が自己とその思想を徐々に形成していった経過を浮かび上がらせる過程の追認 という方法を取り入れた。

その結果、明治 10 年代の陸羯南は、全体主義や排外主義からではなく、その正反対の思想的契機（個人の独立・自他の共生）から、理性的かつ論理的にナショナリズムを受容していたことが明らかになった。つまり、現在一般に想起されるのとは異なり、日本ナショナリズムの発生当初において「国民感情」は自然発生的な自明の感情ではなかった、そうした感情はこれから作り出さねばならなかった、という事情が浮かびあがったのである。

(2) 陸羯南関連研究上の課題：『陸羯南全集』（全 10 巻、みすず書房、1968～1985 年）の公刊以後、近年の陸羯南研究は長足の進歩を見せており、有山輝雄『陸羯南』（吉川弘文館、2007 年）、松田宏一郎『陸羯南 自由に公論を代表す』（ミネルヴァ書房、2008 年）、朴羊信『陸羯南 政治認識と対外論』（岩波書店、2008 年）といった著作が次々とあらわれている。

だがこれらの研究は、『全集』に収められた陸羯南個人の執筆記事に基づいた考察が主であり、新聞『日本』それ自体に対する分析が弱い。『東京朝日新聞』や『東京日日新聞』などと異なり、廃刊後の後継紙が途絶え、いわば失敗した新聞である『日本』の場合、有名な思想家である陸羯南以外の記者が書いた記事が取り扱われる場面は限定的であり、『全集』から漏れた記事群が詳しく分析された例は多くはない。また、売り物としての新聞の価値は社説や論説といった文章のみによって高まるわけではないにもかかわらず、絵や図の挿入に象徴される紙面の視覚的効果など新聞全体の商品的価値については、ほぼ未調査のまま残されている。

2. 研究の目的

上記の研究史の現状を踏まえ、本研究では新聞『日本』（復刻版、全 56 冊、ゆまに書房、1988～1991 年）の紙面全般を調査対象とする。「研究活動スタート」にあたり、明治 20 年代に「国民主義」を主唱したことで知られる『日本』の紙面にしばしば登場する「国民感情（国民精神・愛国心）」ということばに注目し、このことばが意味する内容を当時の歴史的な文脈に照らして正確に捉え返すことを研究目的に定めた。

研究の開始当初においては、『日本』創刊時点（明治 22 年 2 月）からしばらく経過し、新聞社の経営が軌道に乗った明治 24 年を調査対象時期とした。『日本』主筆・陸羯南による社説記事のみならず、論説や雑報など主筆以外の記者が書いた記事や、新聞紙面の視覚性を調査し、当時の『日本』紙上で「国民感情」ということばがどういった文脈で用いられていたのかについて網羅的な分析を行うことを目指した。

3. 研究の方法

(1) 福岡大学図書館での資料収集：研究の対象となる新聞『日本』の複写と取りまとめを行った。当初の研究計画にあった明治 24 年発行分と合わせ、その前年にあたる明治 23 年後期（8～12 月）発行分についても適宜複写と取りまとめを行った。

(2) データベースの作成：アルバイト学生 1 名の助力を得て、まず、明治 24 年前期（1～4 月）発行分の新聞紙面に載った記事を、掲載年月日、掲載号・面・段、掲載欄、タイトル、著者、内容別に分類し、データベースを作成した。なお、当初の研究計画である明治 24 年発行分を読み進める内に、そこで展開された議論の前提について詳しく知る必要が生じ、結果として、明治 23 年後期（8～12 月）発行分についても上記同様のデータベースを作成した。

(3) 資料読解と分析：取りまとめた資料の読解と分析を行った。研究開始当初においては明治 24 年を調査対象時期としていたのであるが、明治 23 年 11 月から翌年 3 月にかけて開催された第 1 回帝国議会に関する報道の前後で『日本』の編集及び宣伝の戦略に変化があることを確認し、結局、明治 23 年発行分の読解と分析に集中することになった。具体的には、明治 23 年の 8 月から 12 月にかけて『日本』が展開した都市貧民問題関連報道と第 1 回帝国議会に政府が提出した窮民救助法案との関連性についての精査を行った。連載記事の掲載頻度・掲載場所・記事の地位のそれぞれがどのように変遷していったのかについての分析とあわせて、1 面トップなど紙面の各所に載った社告に対しても分析を加えた。

(4) 関連先行研究の整理と研究主題の確定：新聞紙面の分析と併行して、日本社会における都市貧民問題に関わる学問的知見の整理を行った。政治思想史分野、社会史分野、国文学分野という 3 つの学問分野にわかれた研究史の流れを見直し、これまでに明らかにされてきた事項をおさえつつ、複数の学問分野の狭間に埋もれて取り残されたままとなっていた問題を剔出した。それを踏まえて本研究の主題を最終的に確定させた。

4. 研究成果

明治23年後期の新聞『日本』の紙面分析を通じて、当時の日本で表面化していた都市貧民問題と、当時興隆しつつあった日本ナショナリズム及び「国民感情」との相関について考察した結果、「国民主義」を唱えた陸羯南を中心とする「思想集団」としての日本新聞社に関する新たな知見が複数得られた。要点を整理すれば以下の通りとなる。

(1) 明治23年9月から11月にかけての『日本』は、社員・桜田文吾の貧民窟潜入ルポルタージュである「貧天地」と「饑寒窟」を連載し、これを目玉に新聞の売り上げを伸ばすことを計画、実行した。桜田のルポルタージュの連載が始まったそもそもの契機には、幹部社員である福本日南の意向、さらにその背後には、社友である杉浦重剛の構想が存在した。被差別部落や都市貧民に対する問題関心は、すでに明治10年代において杉浦と福本が示していたものであったし、危険と隣り合わせの実地探険という方法は、この前年にフィリピンに赴いての調査報道を行った経験をもつ福本由来のものであった。

(2) 一連の主張の前提には社員や社友の海外体験があった。フィリピンでの調査報道を行った福本日南のみならず、イギリス・ロンドンの貧民窟に入って当地の貧民たちと交流した経験をもつ社友・福富孝季の存在が大きかったことを確認した。貧民に対する同情と、そうした貧民の存在に気をとめず私利の追求に盲進する紳士紳商に対する憤怒の双方が、当時の日本新聞社の社員や社友に深く共感されており、そうした社内の共通理解を社会一般に押し広げべく、彼らは協働して紙面の編成にあっていた。

(3) 読者の好評を得た桜田のルポは、この頃「近時政論考」の連載を終えて、「国民主義」の理論化を完了したばかりの主筆・陸羯南にとっても有用だった。明治23年当時コレラが流行していた大阪への出張と当地の貧民窟潜入調査は危険であり、他の社員からの猛反対を受けたにもかかわらず、主筆であり社長でもあった陸の一声で実現し、桜田による貧民窟ルポの連載は継続と拡大が決まった。この時期の『日本』社説のモチーフとして重要なのが、経済上や法律上の関係では説明できない「徳義」に基づく人間関係を回復することの訴えである。貧民や病者といった社会的弱者を待遇する際の眼差しは、経済や法律といった理性上の問題関心からではなく、道義や道徳といった感性上の問題関心から注がれるべきであり、そのような眼差しを担保するものこそ「同じ日本人としての感情」すなわち「国民感情」だった。陸羯南が主唱した「国民主義」を解析しようという際に外すことのできない重要記事の執筆と公表は、当該時期に桜田文吾の主体でおこなわれた貧民窟への潜入報道と連動してなされていた。

(4) 桜田の潜入ルポルタージュという人気記事を社告や雑報欄も交えつつアピールすることによって貧民窟の実態を周知させ、その救済にむけて世論を喚起することを目的とする関連報道が多角的に展開されていた。また、人気記事の評判は購読料収入のみならず広告料収入の増加へとつながり、この頃の陸羯南は創業2年目の新聞社の経営安定化に成功していた。明治23年8月から11月に刊行された『日本』の紙面全体は、「政論記者・陸羯南」の眼力と見識のみならず、「新聞屋・陸実」の才覚と手腕が発揮された実例と認めることができる。

(5) 当該時期の『日本』の各記事は、日本に先んじて文明化の道を突き進んでいた西洋社会を他山の石に、労働組合やストライキ、無産政党の発生を予防するための対策の必要を論じていた。一連の報道の思想的背景としては、社会主義や労働運動への同情や貢献ではなく、これに対する警戒と防衛の方が重要だった。

(6) 日本新聞社内においては、上記した通り数多くの共通理解を確認することができる一方、各記事間における意見の不一致も散見された。論説記者「博愛逸史」がドイツやフランスに倣って貧民救済関連法の導入を論じた一方、主筆の陸羯南はこれには懐疑的で、貧民救助は「社会自然の徳義心」に任せるべきことを前提に、そうした道徳観の鼓吹に努めていた。

(7) 最後に待っていたのは、新聞社が訴えた理想と政府による法案提出という現実とが完全に行き違ってしまう、という皮肉な結末だった。明治23年暮、『日本』の貧民救済キャンペーンが1つの要因となって醸成された世論を背景としつつ、内務省は第1回帝国議会で窮民救助法案を提出した。一見『日本』の訴えが奏効したかのようにみえるが、実際は逆であった。現に、「社会自然の徳義心」に依頼すべき問題は「国法上の義務心」で強制すべきでないというのが持論だった陸によって、同法案とこれを提出した政府は酷評された。議会における審議の不調から政府提出法案の廃案までの経過を見届けた陸は、議会と政党の未熟を強い語調で断罪するに至った。

(8) 貧民救済を目的とした自紙のキャンペーンが意想外の結果を招いたことを受けた陸羯南は、必ずしも一致していなかった社内方針をまとめ、キャンペーンの速やかな撤収にかかった。結果、社員・桜田文吾は本意だったはずだが、「貧天地」と「饑寒窟」に引き続き、精神病院の入院患者たちに取材した彼の第三弾ルポ「顛狂国」は未完のまま打ち切られた。「国民主義」を

唱えた新聞『日本』と主筆・陸羯南の名声が高まり、新聞社の経営も軌道に乗った反面、都市貧民や病者といった社会的弱者をとりまく問題の解決は棚上げされたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

鈴木 啓孝、新聞『日本』と都市貧民問題 明治 23 年 8 月～24 年 1 月の紙面分析を通して、メディア史研究、査読有、第 46 号、2019 年、印刷中

〔学会発表〕(計 2 件)

鈴木 啓孝、ナショナリズムと貧民問題 新聞『日本』を素材に(原題:내셔널리즘과 빈민 문제 신문 “닛폰(日本)”을 소재로서)、韓国日本近代学会、第 37 回国際学術大会、2018 年 5 月 12 日、韓南大学校(韓国・大田市)

鈴木 啓孝、貧民問題と新聞『日本』 明治 23 年 8 月～24 年 1 月の紙面分析を通して、メディア史研究会、2019 年 2 月例会、2019 年 2 月 23 日、NHK 放送博物館(東京都・港区)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。